

ズボンと女性の歴史

衣服の歴史を振り返ると、衣服はその時代を表現し、政治や経済、芸術や文化と密接な関係があることがわかります。

中世以来、男性はズボン、女性はスカートの代表されるように、衣服は性別で明確に区別されてきました。しかし現在、男性の衣服だったズボンは女性の日常着として世代を越えて広く愛用され、衣服の性差は確実に縮まっています。

女性解放運動とズボン

女性の衣服は女性の地位向上や権利獲得の運動に深く関わりながら変化してきました。

18世紀から19世紀の欧米の階級社会では、上流階級の人々がファッションをリードし「男性に従順で優雅でかよい風情の女性」が理想でした。固いコルセットでバストを持ちあげ、細く締めたウエスト、大きく広がる長いスカートという装いは華麗さを極めました。それは女性たちの身体を不自然に束縛する動き辛いものでした。

しかし19世紀中頃から、女性解放の運動が広がり始めると、その動きは衣服の改革にも及んでいきます。フランスでは男女平等を主張するサン・シモン主義者が女性のズボン着用を提唱し、アメリカでは1851年、女性解放を訴えたブルマー夫人が、膝丈のスカートの下に、

ゆつたりしたトルコ風のズボンを推奨します。しかしいづれも世間の非難と嘲笑を浴びて普及には至りませんでした。

女性解放運動の波は広がり続けます。1881年イギリスに合理服協会が設立され、ブルマー婦人が提唱した「女性の身体を拘束しない衣服」を広めるための具体的な行動が起こります。

スポーツとズボン

日常着にはまだ遠かったものの、動きやすいズボンは当時女性にも流行していたサイクリングやテニス、水泳、体操など、スポーツ用衣服として普及していきましました。日本には明治時代、ブルマーの名で女子の運動着に採用されています。

「ちなみに、ズボンは同時代、フランスの女性のベチコートの(UPOON)を誤って男性ズボンと紹介。アラビアの(alibab)が男性ズボンを指します」

スポーツ熱の高まりは1896年の近代オリンピック開催につながり、1912年



には女性の参加が認められます。そして1918年、イギリスでの婦人参政権の獲得は、たちまち各国に波及して、女性の社会進出を押し進めます。

活動的な女性が新しい女性像として注目され始めると、女性の服装もより活動的なものへと変化していきました。

戦時下のズボン

第二次大戦下、服装は厳しく統制さ

れます。イギリスでは生産性向上のため女性の雇用が大幅に促進され、工場で働く女性は男性と同じデニムのオーバーオールが義務づけられました。日本でも女性たちが動員され、東北の農家の日常着だったモンペが活動着に採用されます。ズボンの機能性は図らずも戦争を期に、一般の女性たちに広く認識されました。

服装からの解放

戦後の混乱期を終え、急速な近代化

に伴う女性の社会進出はズボンの普及につながります。特に1960年に発表されたパンタロンスーツは、ズボンの機能性とファッションを融合させて大流行し、女性のズボン姿は社会的にも認知されました。

アメリカが経済大国として世界をリードし始めると、その豊かな文化はヨーロッパや日本の若者たちを囚にします。作業着だったジーンズが若者たちに広まり、抵抗する若者をイメージさせて、60年代の反戦運動や学生運動に参加する若者たちの共通の衣服となります。やがてジーンズは衣服の宿命だった人種や階級、性別や年代、イデオロギーなど全ての差別要素を取り払った自由な衣服として、世界中の人々に受け入れられました。

もはや、衣服の色や形による性差に縛られたり、行動を規制される時代は去り、服装は自己表現する手段の一つとして、多様な個性化の時代に移ったようです。

参考資料…「服飾の歴史近世・近代篇」

「服飾の歴史古代・中世篇」

「服飾の歴史をたどる世界地図」

「西洋服飾史図説」

「西洋服飾史増訂版」